

かかやき
Old and New
Story

ヤマザキマリ

Yamazaki Mari
さん

スペシャル
インタビュー
漫画家・
文筆家・
画家



特殊であることは、なんの後ろめたさの要因でもない

母はオーケストラのヴィオラ奏者。しかも勤当同然で東京から縁もゆかりもない北海道に移り住み、シングルマザーになった人です。そんな特殊な家庭環境に育った私は、子どもの頃からどこかで「自分は他の子と違うんだ」と感じていました。

でも、私が育った昭和40年代というのは、なんだか

よくわからない家というのがまだあけすけにたくさんあった時代で、周りもそれを普通に受容する空気感があつたんです。だから自分が特殊であることになんの後ろめたさも感じていませんでした。幼い私たち姉妹を人に預けて演奏会だレッスンだと飛び回る母に、周りも心配はしていたようですが、まあ仕方ないねと受け入れて

世界を面白く生きるには、タガが外れてるぐらいがちょうどいい

くれている。私は私で留守がちな母に寂しさを感じることはあっても、あまりに猛然と音楽の道を突き進む母の姿に「ウチはこうなんだな」と、もはや諦観の域です。良いも悪いもないですよ(笑)。そして、そんな世間的な「母親」や「女性」といった定型に全く収まりきれない母が、最も身近な大人のモデルでしたから、当然私も周りに合わせなきゃという頭が全くないんですね。「世の中にはいろいろな人がいて、それが当たり前なんだ」子どもなりに世界というものを、そう理解していた気がします。



留守がちだった母・リョウコとの貴重な1枚。びっしり書き込まれた保育園や小学校の連絡帳には「子どもと休みたいけど休めない」。シングルマザーとして苦悩する様子も

パンクに傾倒していた高校時代。肖像画という課題からかけ離れた作品だったにもかかわらず、認めてくれる先生がいたことは大きな励みに



今いる場所だけが世界のすべてではないですから

小学生の頃「絵描きになりたい」と私が言い出したときには一瞬たじろいでいた母が、14歳の私を絵の本場ヨーロッパへと一人旅に送り出してくれたのは、母なりのエールだったのでしょうか。当時、中学校の面談で「画家になりたい」と担任に話し、「飢え死にしたいのか?」と苦笑された私は、「どうしてお金になる仕事じゃなきゃいけないんだ!」と、悩める日々を過ごしていました。そんな私を見て、母の頭に浮かんだのが、ヨーロッパ一人旅というとんでもない荒療治だった(笑)。母としては、「今いる世界だけが世界のすべてじゃないんだから、他の考え方を持つ人たちの意見も聞いてみればいいじゃない」という気持ちだったんだと思います。スマホもない時代、死ぬほど心細い旅でしたが、行く先々で「画家は茨の道だけど頑張りな」と励まされ、「お金にならないことをやっていい世界もあるんだ」そう確信が持てたことは、私にとって大きな収穫でした。

その後、北海道でますますターザン化する私を危惧した祖父母が、私を東京のお嬢様高校に入れるのですが、ターザンが突如「ごきげんよう〜」の世界に放り込まれたのだから大変です。「髪は顔のフレームですよ」と髪形まで指定され、血気盛んな私は「そんなフレームならいりません!」と頭を丸坊主にしたり(笑)。とにかく「同調」と大きく書かれた壁と一人格闘していました。そんな中でも味方になってくれる先生もいて、それが私にとっては大きな救いでした。課題を無視して好きに絵を描く私を見て、叱るところか「あなたは絵の道に行きなさい」と背中を押してくれた美術の先生の話は、今でも忘れられません。「先生」と「生徒」というタガを外して、一人の人間として自分の大切なものを共有できる人がいた。それが何よりうれしかったんですよ。



白いところがあれば描く。チラシの裏でも壁でも絵で埋めてしまう子でした



兼高かおるさんに憧れて。自作の新聞にも「せかい」というワードが(笑)



私にとっては本や映画が「師」。なかでも安部公房は別格の先生です



昆虫とは、最初から何一つわかり合えないところがいいんです。それでも共生していく。人間も同じです

すべては成り行き。思うようにいかないのが人生ですから

確かに幼い頃から取り憑かれたように絵を描き続け、1匹1匹精緻に描かれた昆虫図鑑に魅了され「こんな絵が描ける人になりたい」とは思っていました。絵を職業とすることになったのは完全な成り行きです。高校時代は将来通訳にでもなろうかと思いましたが「あなたはやっぱり絵。高校辞めてイタリアへ行きなさい」と、ほぼ強制的に絵の世界へ。

意外に思われるかもしれませんが、私は今までの人生で目標というものを掲げ、それを達成した、という感覚がひとつもありません。すべては成り行きの結果です。理想や目標を立てても、いつも予定外の展開になってしまう、だったらもう、飄々と日々の出来事



と向き合っていこう!と決めたわけです。

生きるというのは予期できぬことの連続で、理想や予定調和に縛られていると、それにそぐわない自分や他者を追い詰めることになります。いろいろ思い通りにいかないことを楽しむ、そのほうがずっと人生は面白くなると思っています。

実際に17歳でイタリアに渡り、経済的にも精神的にも困窮し、食べていくために油絵をやめて漫画を描き始め、とにもかくにも描き続け、今また20数年ぶりに油絵を描く機会に恵まれているのだから、人生何が起るかわかりません。成り行きに任せてみる。そんな人生も、またアリなのです。

必要なのは「予定調和なんてない」と思える強さです

Yamazaki Mari

Old and New Story

子どもたちへのメッセージ

とにかく世界は広いです。あなたが思っている何百倍も、何万倍も広く、そこにはあなたが心地よいと思える場所も、行ってみたいと思える場所も必ずあります。もし目の前のとびらがどうしても開かず、思い悩むことがあったら、目の前だけでなく脇や後ろのとびらも探してみてください。手当たり次第に本を読むでもいい、旅をするでもいい。無理に今その場にいる人たちと何かを共有しようなんて思わなくていいんです。地球上にある縦軸も横軸も目いっぱい使って、あなたが生きる場所を探せばいい。地球に生きている今この瞬間すべてがあなたなのだと思います。えたら、あなたはもう無敵です!



Present

お江戸deクイズ (p27)
正解者の中から抽選で1名様に
ヤマザキマリさんの
直筆サイン入り著書と
おすすめのお風呂セットをプレゼント!
どしどし応募ください!



Profile

1967年東京生まれ。1984年にイタリアに渡り、フィレンツェの国立アカデミア美術学院で美術史・油絵を専攻。比較文学研究者のイタリア人との結婚を機にエジプト、シリア、ポルトガル、アメリカなどの国々に暮らす。2010年「テルマエ・ロマエ」で第3回マンガ大賞、第14回手塚治虫文化賞短編賞を受賞。2015年度芸術選奨文部科学大臣新人賞受賞。2017年イタリア共和国勲章コメンダトーレ受章。



漫画家・文筆家・画家 ヤマザキ マリさん